

「金融教育を考える」第7回小論文コンクール

優秀賞

金融教育ができる 教員を養成しよう

ー北海道教育大学と北洋銀行のチャレンジー

北海道 北海道教育大学・北洋銀行金融教育プロジェクト

研究統括

北海道教育大学教育学部教授
北海道教育大学教育学部准教授
北海道教育大学教育学部講師
(株)北海道二十一世紀総合研究所調査部研究員
北海道登別明日中等教育学校
札幌市立山鼻中学校
釧路市立幣舞中学校
北海道教育大学附属旭川中学校
標茶町立虹別小学校

鎌田 浩子
川邊 淳子
濱地 秀行
小林 あい
秋山 玲奈
太田 和幸
大西 康史
世戸 聡子
野口 泰秀

知るぽると

www.shiruporuto.jp

金融広報中央委員会

はじめに

北海道教育大学は、札幌校、函館校、旭川校、釧路校、岩見沢校の5キャンパスからなる大学であり、このうち札幌校、旭川校、釧路校が北海道全域の教育現場に密着した「教員養成」を行っている。一方北洋銀行は、資金量・預金量は道内銀行で最大かつ第二地方銀行で最大の資金量であり、北海道民にとって最も身近な銀行である。北海道教育大学では、中期目標に「北海道の地方自治体、公共・民間団体及び企業と連携した研究活動により地域の総合的な発展に寄与すること」「教育現場に立脚した専門的研究」を行うことをあげており、北海道教育大学と北洋銀行は平成16年11月に「教育に関する覚書」を締結し、「北海道教育大の児童・生徒及び学生の教育支援に関すること」「北海道教育大が実施する現職教員の教育・研究及び研修等の支援に関すること」などの協力体制を作った。さらに、平成19年9月に金融教育の「共同研究契約書」を締結し、平成20年度から本22年度がその期間となっている。

これまでの研究の成果としては、平成21年3月附属札幌中学校において、北洋銀行津山博恒調査役と附属札幌中学校太田和幸教諭(当時)による共同授業の実施、平成21年及び22年8月北海道教育大学において、北海道教育大学濱地秀行講師による公開講座の開設、平成21年10月札幌全日空ホテルにおいて、北海道教育大学、北洋銀行、東京学芸大学、みずほフィナンシャルグループ主催の金融教育公開研究会の実施などがあげられる。そして、本年度その集大成として北海道教育大学の教員養成3キャンパス(札幌校、旭川校、釧路校)において「金融教育」という名称の授業を実施した。ここでは、その授業報告を行いたい。

1 授業の位置づけと形態

授業は、教養科目の「現代を読み解く科目群」の一つであり、社会科、家庭科などの教員免許を取得するための専門科目ではない。この教員養成3キャンパスの学生は教員免許が卒業要件であるため全員が何らかの教員免許を取得する。特にほとんどは小学校教員免許を取得し、その約半数は大学卒業後、実際に小学校の教壇に立つ。このため、これらの学生が金融教育の授業を受講することはそのまま北海道における学校教育における金融教育の普及につながると考えられる。また、平成24年度より本学の教養教育の大幅な改定が予定されているが、その後も「金融教育」の授業は継続される予定である。

現在の授業の位置づけ(単位数は教員養成キャンパスの例)

科目等	科目名	単位数	単位数小計
教養科目	日本国憲法	2	24
	体育科目	2	
	コミュニケーション科目群	6~8	
	地域学科科目群(全学連携科目)	2~4	
	人間・子ども理解に関する科目群	2~4	
	大学入門科目群	4~6	
	現代を読み解く科目群(全学連携科目を含む)	2~4	

授業は、各キャンパスに金融教育を担当できる教員がそろっていないこと、生活科、社会科、家庭科と多角な視点から金融教育を学ぶことが重要であること、現職教員にも授業を担当してもらいより具体的に授業をイメージできるようになることが必要であることなどから夏休み期間中8月6日(金)から9日(月)の4日間の集中講義で開講した。授業は双方向(3方向)のテレビ授業で実施した。本システムでは、お互いに画像や書画及びマイクを用いて音声のやりとりができる。また、各キャンパスに大学院生のTAが配置された。ただ、夏休み期間で、他の講座でのシステム利用が重なり、最終日4日目(第13~15回)は札幌校の回線が使用できず、旭川校と釧路校は釧路校から野口泰秀教諭が双方向で、札幌校は濱地講師がそれぞれ授業を行った。受講生(初日登録者)は、札幌校11名、旭川校17名、釧路校28名の計56名であった。

「金融教育」の各回の授業テーマ・発信地と担当者

第1回	オリエンテーション・金融教育について(発信札幌・鎌田)
第2回	貨幣と金融(発信札幌・濱地)
第3回	学校教育における金融教育(発信札幌・鎌田)
第4回	社会人としてのマネーモラル・銀行の役割と社会的責任(発信札幌・小林)
第5回	小学校の金融教育って?(発信釧路・野口)
第6回	小学校生活科からの金融教育の提案(発信釧路・野口)
第7回	小学校社会科からの金融教育の提案(発信釧路・野口)
第8回	中学校社会科からの金融教育の提案(1)(発信札幌・太田)
第9回	中学校社会科からの金融教育の提案(2)(発信札幌・太田)
第10回	中学校家庭科からの金融教育の提案(1)(発信旭川・世戸)
第11回	中学校家庭科からの金融教育の提案(2)(発信釧路・大西)
第12回	高等学校家庭科からの金融教育の提案(発信旭川・秋山)
第13～15回	起業家ゲームをしよう 札幌校(濱地) 生活科の教材を作ろう 旭川校、釧路校(発信釧路・野口)

2 授業の概要

本章は、各授業担当者からの授業概要の報告である。

第1回 オリエンテーション・金融教育について(北海道教育大学・鎌田浩子)

規制緩和、金融ビッグバンの遂行、ICT化の進展などによって、マネー環境は大きく変容した。携帯電話の普及やインターネット決済など、子どもや若者も購入や決済をめぐるトラブルに巻き込まれている。金融教育とは、お金の動きを理解しそれを通じて自分の暮らしや社会について考え自らの価値観を磨きながら、より豊かな生活や社会づくりに向けて、主体的に行動できる能力を養う教育であり、キャリア教育と同様に自立した若者の育成に不可欠なものである。このため本授業では、金融についての知識を身につけるとともに、教員となって金融教育を実践するための知識、技術を身につけることを目標としている。このため本講義では、本学と共同研究を行っている北洋銀行からゲストティチャーを招き、実際に小・中・高等学校の生活科・社会科・家庭科などで金融教育を実践している現職の教員を講師に招いて実施することを説明した。その後、お金や生活設計についてより身近にとらえて授業に臨むことを目的として「これであなたもひとり立ち」(知るぽると)の「あなたにかかったお金はいくら」を各自に計算してもらった。

第2回 貨幣と金融(北海道教育大学・濱地秀行、資料参照)

まず、人間の生物上の特徴である「社会的に分業すること」と「長生きをする」ということから、貨幣と金融が人間の生活に欠かせないものであることを説明した。その際、物語などを使って、抽象的ではなく、具体的にイメージできるような説明にした。また、歴史的な観点から、貨幣と金融について学ぶことの重要性が大きくなっていることを説明した。例えば、産業革命によって貨幣を使用することが飛躍的に大きくなってきたこと、日本では、戦後に生活モデルが確立し、それに従ってさえいればそれほど困ることはなかったのだが、バブルの崩壊とともに、生活モデルそのものが崩れてしまったこと、などである。そして、そこから、金融教育がどのように必要になってきたのかについて、説明した。

第3回 学校教育における金融教育(北海道教育大学・鎌田浩子)

第1回で行った「あなたにかかったお金はいくら」について、合計金額の確認と感想等を学生にたずねた。次に金融に関する教育が現在の学習指導要領において、どのように位置づけられているのかについて家庭科を中心に解説を行った。

第4回 社会人としてのマネーモラル・銀行の役割と社会的責任((株)北海道二十一世紀総合研究所・小林あい)

本講では、「社会人としてのマネーモラル」というテーマで、多重債務や金融犯罪の現状を取り上げ、現代社会を生きる

上で身に付けておくべきお金の知識について説明した。さらに、「銀行の業務と社会的役割」というテーマで、銀行の三大業務の説明を軸に、貯蓄や借入れをするにあたってのポイントなどを解説した。また、金利の計算やクイズなどを取り入れることにより、学生に自ら考えてもらう時間もところどころに設けた。

第5回 小学校の金融教育って? (標茶町立虹別小学校・野口泰秀)

小学校教育における金融教育の必要性について学生の考えを聞きながら講義を実施した。その必要性について、学生の反応はさまざまであったが、現実には、多様な金融商品の開発や自己破産者の増加などという社会状況、お小遣いや買物を通して実際に金銭を使うという子どもの実態などをもとに、小学生であってもお金や金融のさまざまな働きを理解し、それを通じて自分の暮らしや社会について深く考え、主体的に行動できる人間を育てるために金融教育が必要であることを説明した。また、金融教育を進めていく際には、発達段階に応じた指導内容の配慮が大切であり、特に、小学校段階では、ものの大切さ、約束の遵守、欲望の抑制、リスクの管理などといった内的側面を育てる学習展開が必要であることを説明した。さらに、小学校における金融教育の目標と内容、主な学習活動について表にまとめ、小学校低学年から高学年に向けて、金融教育の目標実現のために、どのような素材や教材を使うとよいか、具体的な単元構想と授業の様子について説明した。

第6・7回 小学校生活科、社会科からの金融教育の提案 (標茶町立虹別小学校・野口泰秀)

小学校における金融教育の授業の実際について説明した。金融というと「貨幣」「貯蓄」「消費」……という外的側面がイメージされやすい中で、内的側面を育てることを大切にしたい小学校の金融教育について説明した。特に、お金を扱う場合の大切な構えとして信頼関係を取り上げた。また、信頼関係を築く条件として、ものを大切にしたい気持ちや約束を守る気持ちを育てることを説明し、教育活動全体を通して身につけることが大切であることを話した。そして、上記のことを踏まえ、第2学年生活科「子ども広場をつくろう」の実践について指導案とワークシートをもとに説明した。まず、金融教育と生活科のかかわりを学習指導要領の生活科の内容をもとに説明した。また、小学校の特質を生かした、生活科を核としながら、図工科・算数科との関連を図った単元の構想について説明した。ここでは、大単元を4つのユニットに分け、短い時間でのサイクルで取り組むことや身につけたい力との関連を話した。演習としては、本時案をもとに、紙幣や硬貨を見ながら、気づいたことをワークシートに記述したり、そこから、学級マネーが作成された経緯について捉えたりできるように説明した。

第8回 中学校社会科からの金融教育の提案(1) (札幌市立山鼻中学校・太田和幸)

中学校社会科における金融教育の位置づけ、地理・歴史・公民的分野の学習と金融教育の関連事項について、学習指導要領の記述と教科書の内容構成から概論的に説明した。その後、小学校との関連及び中学校の他教科との関連についてふれ、高等学校公民科での学習に関連付けて、金融教育の系統的・横断的な学習の必要性を説明した。学生の学習経験や生活経験が、金融教育を教師として進めていく上で重要な具体例になることを示し、「あなたの経済感覚チェック」という演習をした。自分が中学3年生の時のことを思い出して、生活の面での消費についてと、小遣いなどの金銭の管理について想起し、学生間の回答を交流しながら、学生の生活の共通性や、地域性を整理した。これは、金融教育という大きな概念には、子どもたちの身近な生活とのつながりが必要であるということを伝えていくことがねらいであり、学生の経験を具体例として、金融教育の社会科としての実践の一つの視点を理解するものになった。

第9回 中学校社会科からの金融教育の提案(2) (札幌市立山鼻中学校・太田和幸)

前時に続き、中学校社会科における金融教育の実践と考え方を、実際の公民的分野の授業を部分展開しながら、演習的に学習する時間とした。公民的分野では、金融だけを取り上げるのではなく、家計から国際経済までの幅広い経済活動について学習していく。学生には、「家計の収入と支出の区分」を記入してもらい、金融を含めた経済的用語についての理解を進めるためには、用語の意味に留意して指導することの重要性を示した。さらに「家計と景気の関係」や「好景気の時にはどのような経済的な活動が見られるのか」を、実際のワークシートを使って学生にも考えさせ、学生間の意見交流から、指導する側の理解の重要性を理解するものになった。特に、好景気の時には、金融機関からの借入れは増えるのか減るのかという問いについては、何を主語にして考えるのかによって答えが異なることに気づき、複数の視点で経済活動を捉えることの大切さに学生が気づいていくものとなった。

第10回 中学校家庭科からの金融教育の提案(1) (北海道教育大学附属旭川中学校・世戸聡子)

新学習指導要領技術・家庭科(家庭分野)においては、「D 身近な消費生活と環境」の内容は、「(1)ア 消費者の基本的な権利と責任」「(1)イ 販売方法の特徴、物資サービスの選択、購入及び活用」などについて指導する。指導に当たっては、「消費者にかかわるトラブルについてロールプレイングする」「自分や家族の購買経験から、それぞれの販売方法の利点や問題点について話し合い、購入の目的に応じた販売方法を検討する」など、情報社会における消費生活の変化に対応して、中学生の身近な消費行動とかかわりのある具体的事例を扱うよう配慮し、題材を設定することになっている。家庭分野の3年間の授業時数は、他教科と比べて決して多くない。「金融教育」のみを家庭分野の題材として設定することは非常に難しく、題材の指導計画に工夫が必要である。そこで中学校家庭科で金融教育を扱う場合、社会科(公民分野)や数学科などと連携を図りながら、金融にかかわる学習内容が重複しないように配慮して題材の計画をすること、さらに、家庭分野の内容は、小学校家庭科とのつながりを考えて設定されているので、中学校での学習内容は発展的な学習となるように工夫する必要がある。中でも「お小遣い帳の書き方」「人の一生にかかる金額の計算」「金利の意味と計算の仕方」などは、授業の導入に用いられることが多く、全ての校種で取り上げられることが予想される。よって児童・生徒に「以前にも似たような内容を勉強したことがある」と言われたとしても、それぞれの発達段階に合った金融教育の学習の目的と目標を明確にして授業展開をすることが大変重要である。何度も繰り返し学習することの成果を期待して、金融教育の授業展開を考えたい。

第11回 中学校家庭科からの金融教育の提案(2) (釧路市立幣舞中学校・大西康史)

講義は「中学校家庭科としての金融教育の考え方、および単元計画の一例」と題して行った。まず、最初に中学校家庭科としての金融教育の実際は「消費者教育」であり、学習を通して「賢い消費者を育てること」が大きなねらいであること、そのために押さえておきたい力を6点提示した。その後、授業と単元を構築するにあたっての注意点を実際の例を使いながら説明した。講義の後半は、授業で用いたプリントを実際にやってもらい、交流したが大旨好評だったと思われる。

第12回 高等学校家庭科からの金融教育の提案(北海道登別明日中等教育学校・秋山玲奈)

講義では、金融教育について話をさせてもらう前段階として、高校家庭科の教科の仕組み(2単位の家庭基礎・4単位の家庭統合、職業科などでの4単位の生活デザイン)について話をし、現在の勤務校で履修している家庭基礎での金融教育(7時間扱い)の内容を紹介し、実際の授業体験をしてもらった。バーチャル生活として家計のやりくりを考える中で、食費にいくら使っているかなど具体的に考えることができたと思う。この講義において、やりくりを考えながら家計の収支を行うことの重要性について学生の皆さんに再考してもらい、自身の一人暮らし生活を振り返るきっかけになってくれれば幸いである。

第13～15回 1. 札幌校 起業家ゲームをしよう(北海道教育大学・濱地秀行)

まず、「日本経済教育センター」の教材である「牛井屋経営シミュレーション」を実際に体験させ、その上で、この教材を用いる際に必要となる知識について教えるとともに、中学校社会科の公民的分野のどこと結びつけて用いるのか、どのように結びつけていくのかについて考えさせた。

2. 旭川校・釧路校 生活科の教材を作ろう(標茶町立虹別小学校・野口泰秀)

釧路校と旭川校をつないでの講義で、第5回で説明した「リサイクル品を販売しよう」について、演習を実施した。学生に、ペットボトルや空き缶等を使って実際にリサイクル品を制作させるとともに、その作品に値段をつけ、値段の根拠を自分なりに明らかにしながら、ものやお金の価値などを学ぶようにしてきた。学生が作成したものは、ペン立て、魚捕り箱、小物入れ、栽培ポット、手回し扇風機、貯金箱などであり、それぞれに時間をかけて工夫を凝らしていた。また、自分の作品に値段をつける活動では、時間や工夫、材料、労働等を考えるように指示した。ほとんどの学生は、安価な値段をつけていたが、自分の作品に愛着をもった学生もいた。この値段をつける活動で、どのような価値を見いだしていくか？ また、どのような自己決定をするか？ が、小学校で大切にしたい金融教育であるという説明をした。最終的には、釧路校と旭川校で5組ずつ発表しあい、交流を図ることができた。お互いにどのようなリサイクル品を作っているのかが意識された。このような雰囲気自体も金融教育と言えると感じた。

おわりに

本授業の目的は、金融教育のできる教員の育成をめざすものである。このため当初、金融教育とは何か等の講義を行い、学生が指導案と教材を作成しそれを基に模擬授業を行うという流れを計画していた。しかしながら、教養教育の科目として開設されたことから、その受講生の多くは1年生であり、しかも前期授業であり、学習指導案を書くどころか、学習指導要領などについても知識も浅い。このため、金融についての知識を身につけることや金融教育についての実際にふれることを中心として実施した。以下は学生の授業後に無記名で行ったアンケートの感想である。

- ・銀行の仕事に以前興味をもったことがあったり、現在自分が奨学金を借りているのに、システムがあまり理解できていなかったのが今回勉強できてすごくよかったです(2年・女)
- ・最初金融教育と聞いて社会的な感じだと思っていたが、さまざまな視点からの教育について学ぶことができてよかった(2年・男)
- ・ものを大切にするといいことも金融教育に入ること(1年・女)
- ・さまざまな先生の考え、取り組みなどがよくわかりよかったです(1年・男)
- ・教科と連携することでもっと理解が深まるし、子どもたちにとって楽しいものになると思った(1年・女)
- ・どのように金融教育を授業すればいいかがわかったので、自分が教員になったときに役立つ講義であったと思う(1年・女)

このように授業の目標である、金融についての理解、金融教育は特定の教科や領域だけで行うのではなく、教科や校種で関連をもって行うことの重要性、そしてものを大切にすることも金融教育であることの気づきなど、金融教育への理解が学生の感想から読み取れる。今回の授業についての学生のアンケート調査については今後分析を行い、関連学会などで発表の予定である。本学の取り組みが大学における金融教育の普及への一石を投じることになるとともに、特に北海道内の小・中・高等学校における金融教育の進展につながることを願っている。今後はさらに金融教育のできる教員養成のため、教員免許取得のための選択専門科目としても開講できるよう準備を進めたい。

資料 授業教材例

「第2回 貨幣と金融」教材プリント(抜粋)

なぜ金融教育を学ばなければならないのか
—貨幣と金融—

1 貨幣とは何か

物語：漁師のおやじ

ある海岸に、毎日、イワシを獲って食べていた漁師がいた。しかし、毎日イワシだけを食べるのは飽きる。それで、時にはイワシ以外の魚介類も獲っていたのだが、それでも飽きてしまう。

「米ば食いたかあ……」

男は、つぶやいた。そこで、自分が獲ったイワシを持って、歩いて半日ほどかかる農村に出かけていった。

「すんませんが、このイワシば、あんたんとこの米と交換してもらえんじやろうか？」

農村のある農家に行って、男はこのように頼んだ。すると、

「よかですよ。こん米ば、持っていかんね。」

農家の主人は、気前よくイワシと米の交換に応じた。ここに来ればいつでも米が手に入る。男はそう思って、自分の家に帰っていった。

数日後、男のいる海岸では、イワシが大漁だった。こんなにイワシがあっても、1人で食べるなどできない。そうだ、またあの農家に行って、米と交換しよう。男はそう考え、大量のイワシを持って、農家に出かけていった。

農家に着くと、主人にこう言った。

「また、イワシば、米と交換してくれんかね？ 今度は、前の倍のイワシばい。」

また米が食べられる、と、男はワクワクして、主人の返事を待った。ところが、主人は、申し訳なさそうな顔をしている。

「どけんしたとね？」

男は主人に聞いた。主人は、ようやく重い口を開いた。

「すまんけど、今日は、米はやれんとたい。」

男は驚いた。

「なして？ なしてね？」

男は、半ば責めるように、主人に詰め寄った。

「こないだ、米と交換してイワシば、たくさんもろうたろうが。その夕飯は、もちろんイワシやった。ワシは、イワシが大好物やけん、喜んで食ったとよ。ばってん、イワシを初めて見た子どもたちは、匂いをかいただけで、『うわっ、魚臭か！』って言うて、食べようとせんかったと。それでくさ、『父ちゃん、今度は肉が食いたかあ』って言われたたい。ワシは交換してやりたかばってん、子どもたちにそげんかふうに言われるとなあ……」

その話を聞いた男は、ガッカリして、大量のイワシを家に持って帰った。

そのころ、隣町では、肉屋のおやじが、こうつぶやいた。

「魚ば食いたかあ……」

残念ながら、漁師のおやじは、米を手に入れることに失敗したようである。だが、よく考えてみれば、おやじは米を手に入れることができる。最初に、肉屋にイワシを持って行って肉と交換し、その肉を農家に持って行って米と交換すればいいのである。しかし、肉屋がイワシをほしがっていることを知らなかったので、そうすることはできなかった。

人間は、分業する動物である。分業するということは、交換が絶対条件である。だが、おやじのように、交換することで、自分がほしいものが必ず手に入るとは限らない。なぜなら、作っているものとほしいものがお互いに完全に合致しない限り、交換に応じてはくれないからである。もちろん、説明したように、肉を間に置くことによって、おやじがほしい米を手に入れることはできる。しかし、その場合には、誰が何をほしがっているのか、すべてを知っていないといけない。それは事実上不可能であり、たとえ可能だったとしても、自分がほしいものを手に入れるためにどのくらい迂回すればいいのか。おそらく途方もない数字になるだろう。

それにもかかわらず、人間は分業を行っている。現代社会において、自給自足生活はほぼ100%ありえない。どうやって、交

換の難しさを克服したのか。それは、「貨幣」の発明である。交換における貨幣の役割を、漁師のおやじを例に説明しよう。おやじは、たくさん獲ったイワシを市場に持っていき、イワシがほしい人にそれを売る。「売る」という行為は、イワシと交換に貨幣を受け取ることである。そして、そうやって手に入れた貨幣で、今度は米を買う。「買う」という行為は、米と交換に貨幣を手放すことである。こうすることで、結果として、イワシと米を交換することができる。農家や肉屋も同じような「売る」と「買う」を通して、それぞれ肉やイワシを手に入れることができるのである。

このことから、貨幣の第一の役割が明らかになる。それは、「交換の媒介」である。イワシと米の間に貨幣が入ることによって、スムーズに交換ができるようになる。そしてそのことは、人間の分業に不可欠なものなのだ。

次に、貨幣の第二の役割に移ろう。1000円、100ドル、50元…… 貨幣には数字がついている。これは、現代に限ったことではなく、例えば、江戸時代には両、貫、文などの貨幣単位があった。貨幣に数字が必要な理由は、「価値の尺度」としての役割があるからである。再び、漁師のおやじの例を使うならば、米とイワシを交換するといっても、どのような比率で交換すればいいのか、というのは大きな問題である。おやじは、できるだけ多くの米を手に入れたいだろうし、農家の主人も、できるだけイワシをたくさん手に入れたいと思うはずである。このとき、イワシ1匹＝100円、米1kg＝500円、というように、貨幣でそれぞれの商品の価値が表してあれば、イワシ5匹＝米1kgとすぐにわかるはずである。これで、交換がよりスムーズに進むことになる。

貨幣には、もう1つの役割がある。それは、「価値の保蔵」である。この役割は、第一と第二の役割から派生してきたと言えるかもしれないが、特に大事なものは、「貨幣は貨幣だから価値がある」という点である。¹⁾この点について、みたび、おやじに登場してもらって、詳しく説明しよう。おやじがイワシを売ったのがイギリス人で、イワシと交換にイギリスの通貨ポンドを手に入れたとする。このポンドを持っていき、米を買おうとした。だが、農家の主人は、ポンドを見るのは初めてだった。そのため、価値があるものとは思わず、ポンドと米の交換を拒否してしまった。こうなると、交換はストップしてしまう。交換が成り立つためには、農家の主人が肉を手に入れるために肉屋に渡すだけの価値があると、農家の主人が思わなければならない。そして、主人にそう思わせるのは、肉屋がイワシを手に入れるために漁師に渡すだけの価値があると、肉屋が思わなければならない。つまり、みんなが貨幣と思わなければ、それは貨幣にはならないのである。このことは、まだ貨幣の価値がわからない乳児に紙幣を渡しても、単なる紙切れとしか思わないということを考えれば、わかるだろう。ということは、みんなが貨幣を貨幣だと考え、それを好きなときに好きなものと交換されることが保証されれば、何でも貨幣になる。太平洋のヤップ島で、大きな石の輪が貨幣になっていたことは有名である。

こう考えてくると、「価値の保蔵」という役割がわかるだろう。漁師のおやじは、イワシが大漁のときにイワシを売って貨幣を手に入れ、それをすべて使わずに、時化で漁にでることができないときには、とっておいた貨幣で米を買えば、餓死することはない。それが、貨幣の第三の役割である。

2 金融とは何か

物語：若い農夫

ある農家の三男として生まれた男は、小さいころから冒険が大好きで、「いつか大きなことをしてやる」が口癖だった。

18歳の誕生日を迎えたまさにその日、男は両親にこう言った。

「私は、これから旅に出ます。なんでも、西の方には、大変豊かな大地が、まだ手付かずのまま残っていると聞いております。私は、その土地に行って、大きな畑を作ります。それが私の夢なのです。」

父親は、黙って男の話を聞き、そして、大きくなずいた。それは、許しの合図だった。母親のほうは、やや心配そうな面持ちだったが、それでも、自分の息子を信じていた。

男は、何度も大きな山脈を越え、何本もの大きな河を渡り、ようやく西の土地に着いた。家を出発してから、すでに2年が経過していた。

「よし、ここで大きな畑を作り、周りに羨ましがられるぐらい大きな農家になってやる！」

男は決意した。

だが、ここで問題が起こった。畑を作るといっても、小麦の種がないのである。男は、西の土地の農家を回ったが、見ず知らずの男に小麦の種を分け与えてくれるものなどいなかった。最後に残ったのは、村の外れにある、ある老父が住んでいる農家だけになった。

「こんにちは、私は東の土地から来たものです。この土地で畑を作るためにやってきました。でも、畑に蒔く小麦の種がありません。どうか、種を分けてはいただけないでしょうか？」

老父は、ロッキングチェアに腰掛けたまま、こう言った。

「たしかに、ここには小麦がある。だが、これは、私が食べるために貯めておいたものだ。ご覧の通り、私はもう働くことはできない。だから、小麦を分けてあげることはできないよ。」

すると、男は、目を輝かせて、こう言った。

「それならば、1年後、私が小麦を収穫したら、あなたから分けてもらった倍の小麦をお返しします。そうすれば、あなたが食べるのに困ることはないでしょう？」

老父は、少し考えてから、ゆっくりうなずいた。

「わかった。それでは、そういう約束で、小麦の種を分けてあげよう。」

「ありがとうございます！ このご恩は一生忘れません。もちろん、約束は守ります。」

男は、それから一生懸命に畑を耕し、分けてもらった小麦の種を蒔き、丹精込めて小麦を育てた。そして1年後、蒔いた種の10倍もの小麦を収穫することができた。男は、感謝の意を込めて、分けてもらった種の3倍もの小麦を、老父に返した。

「あなたがいなかったら、私はこれほどの小麦を収穫することはできませんでした。本当に感謝しています。」

小麦を受け取った老父も、うれしそうだった。

それから40年、男は真面目に働いた。この西の土地で結婚し、5人の子どもと15人の孫にも恵まれた。畑の面積も、当初の10倍にもなった。だが、40年の疲れが男を襲ったのか、働くことがだんだんつらくなってきた。そこで、畑をすべて子どもたちに分け与え、自分は引退することにした。そのときには、あと30年は生きていけるだけの食料の蓄えを持っていた。

引退して1年、妻を亡くし、男は1人で住んでいた。もちろん、近くに子どもたちは住んでいて、孫もときどき遊びに来る。だが、今の季節はちょうど収穫の時期であり、子どもたちも孫も忙しかった。男は特にすることもなく、ロッキングチェアでウトウトしていた。すると、急に、バン!と扉が開く音が聞こえた。孫が久しぶりに遊びに来たのかと思い、目を開けてみると、そこには、この土地とは違う衣装を身にまとった若者が立っていた。顔つきも、このあたりの土地の人間とは違っている。だが、同時に、男は懐かしさも感じていた。

「こんにちは、私は東の土地から来たものです。この土地で畑を作るためにやってきました。でも、畑に蒔く小麦の種がありません。どうか、種を分けてはいただけないでしょうか？」

いきなり、若者が元気よく話したので、男は面食らってしまった。種を分けてくれ？ 私の家にあるのは、私が食べるための小麦だ。ここまで、私がどれだけ努力してきたのか、この若者はわかっているのか。私が作ったもの、見ず知らずの若者に分けるなど、もってのほかだ。

「すまんが、それはできないな。どこか、他でもらったらよいだろう？」

男はそう言い放つと、ドアをバタンと閉じてしまった。

瞬間…… 男は急にこの世から消えてしまった。そのとき、男の脳裏に浮かんだのは、40年前の自分の姿であった。

どうやら、農夫の男はタイムスリップし、40年前の若い自分に出会ったようである。だが、小麦を分け与えなかったため、若いころの自分は西の土地で生きていくことができなくなり、結果として、自分の存在そのものを消し去ってしまった。これは、物語の上での話であり、現実には起きるわけではない。ただ、この物語から、「金融の役割」を知ることができる。

農夫が若いときに出会った老父が持っていたものは、自分が食べていくための食料であった。これは、「貯蓄」である。長寿である人間²⁾には、この貯蓄が不可欠であるが、金融の役割を知る上で、まず大事なことでもある。

さて、農夫は、その貯蓄を分けてもらうことを、老父にお願いした。いや、分けてもらう、という表現は正しくない。なぜなら、1年後、農夫は3倍もの小麦を返したからである。だから、より正しくは、借りたというべきであろう。その小麦の種を蒔き、1年後、多くの小麦を収穫することができた。この行為は、「投資」と呼ばれる。この投資がなければ、人間は生産をすることができない。その意味で、投資も人間の活動にとって不可欠なものである。そして、投資には、貯蓄が必ず必要になる。このことは、小麦を生産し、次の年のためにその小麦の一部をとっておくという行動からわかる。そして、投資に使われた貯蓄に対する報酬、物語の中では返した小麦のうちの2倍分が「利子」である。

自分の貯蓄を投資に使うならば、話はそれで終わりである。だが、物語のように、他人の貯蓄を投資に使う場合がある。それが

「金融」である。特に、現代社会のことを考えると、この言葉がよく理解できるだろう。そのためには、前の物語の漁師のおやじに再び登場してもらうことにする。

イワシが大漁だった漁師のおやじは、そのイワシを市場で売り、大金を得た。それは、時化になったとき、米を買うための金額をはるかに超えていた。そこで、一部のお金を残して、銀行に預けることにした。銀行は、そのお金を、靴屋を開きたいと思っている男に貸すことにした。このとき、銀行の役割は、貯蓄を投資に向けたことである。別の表現を使うなら、お金が余っている人(=漁師のおやじ)からお金を必要としている人(=靴屋の主人)に、お金を融通した。まさに、「金融」なのだ。このような仕事をしているからこそ、銀行は「金融機関」と呼ばれている。

この例のように貨幣を使うことには、大きなメリットがある。先ほどの物語の場合、農夫の男は、小麦の種を借りてきた。それは、小麦を作るためであって、キャベツを作るためではない。しかし、漁師のおやじのイワシは、靴に変わってしまう。つまり、貨幣を使うことによって、いろいろなものへの投資が可能となるのである。

3 金融教育の必要性

ここまで来ると、金融教育が、現代的な教育課題であることがわかるだろう。人間は、分業と長寿を特徴とする動物であるから、貨幣と貯蓄が必要である。貨幣と貯蓄が、世界中で急速に拡大したのが18世紀後半以降、特に第二次世界大戦後である。³⁾ただ、日本の場合には、目標とする生活モデルがあったため、それほど深く考える必要はなかった。だが、その生活モデルが崩壊した現代、学校現場における金融教育の必要性は、ますます大きくなっている。

金融教育に対しては、批判もある。その内容は、「小学生に株の買い方を教えるのか」といったものが多い。もちろん、株は決して安全なものではない。しかし、だからといって、株についてまったく教えないというのは、間違っていると考える。包丁は、人を刺すことはできるが、料理に不可欠なもの、だからこそ、きちんと学校現場で使い方を教えているのであるから。

注1) この考え方については、岩井(2006)を参照のこと。

注2) 生殖可能年齢後も、人間が生きている理由として、「おばあちゃん仮説」というものがある。「おばあちゃん仮説」とは、おばあちゃんが子どもの面倒をみることによって、子どもの生存率が上がるというものである。詳しくは、栃内(2009)を参照のこと。

注3) 石川(2010)では、進化心理学の枠組みを使って、狩猟採集中心の人間の生活が、農耕中心になったことで、貨幣の役割が大きくなったと分析している。しかし、大多数の人間が貨幣を使うようになったのは、産業革命後、働いて賃金を得る労働者が飛躍的に増えたことのほうが大きいと思われる。

<参考文献>

石川幹人『だまされ上手が生き残る 入門! 進化心理学』光文社新書、2010年

岩井克人『二十一世紀の資本主義論』ちくま学芸文庫、2006年

栃内新『進化から見た病気』講談社ブルーバックス、2009年

(文責 北海道教育大学教育学部 濱地秀行)